

省力・低コスト稲作技術 育苗箱全量施肥法

1. 技術の概要

「水稻育苗箱全量施肥法」は専用肥料「**苗箱まかせ®**」(ジェイカムアグリ株式会社)を播種時に育苗箱内に施用することで、窒素肥料の本田施用や追肥の作業を省略できます(省力施肥)。また、根の近傍に肥料が施用されるため、肥料利用率が極めて高く、施肥量の削減(低コスト)に寄与します。

2. 技術導入のメリット

- ① 播種作業時に本田用の施肥(基肥・追肥)を代替するため、**大幅な施肥の省力化**が可能です。
- ② 肥料と根が接触しているため肥料の利用率が非常に高く、**施肥量が削減できる**環境負荷軽減型の施肥技術です(目安として慣行施肥に対し、約10~40%節減可能)。



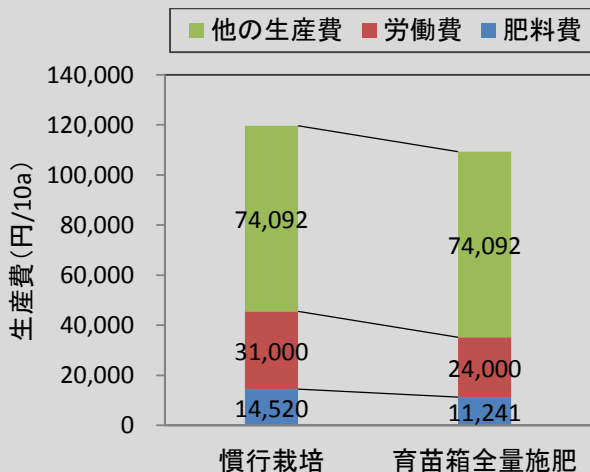
【層状施肥】



【箱底施肥】

- ③ 施肥量減、施肥作業の軽減が可能となり、例えば、土壤中のリン酸、加里が十分な圃場ではそれらの肥料成分が削減できるため、**大幅な施肥コスト削減**が期待できます。
- ④ 田植時の施肥作業が不要となるため、**天候に左右されずに計画的に作業ができる**大規模生産者向けの施肥法です。
- ⑤ 肥料が均一に施肥されるため、圃場内の生育のバラつきが小さくなります。また、生育の後半まで窒素栄養が持続するため、品質が向上します。

3. コスト削減効果



福島県担い手育成総合支援協議会
H21年の例(G法人の例、経営面積48ha)

4. 留意事項

- ① 肥料の分だけ床土量を減らします。
- ② 育苗期の気温が高温で推移すると苗が徒長することがあります。
- ③ 育苗箱内の保水性が低下し、根張りが不十分になることがありますので、保水性の高い培土の選択、灌水回数の増加等の対応が必要です。
- ④ 肥料の皮膜が損傷すると、苗の枯死や肥料成分溶出など、期待された効果を発揮できない場合があります。
- ⑤ あらかじめ土壌診断を行い、リン酸、加里が不足する場合は土づくり肥料などで補給してください。
- ⑥ 慣行の施肥体系と比較して、茎数が少なく推移しますが、無駄な分けつが少なく一穂粒数が多い秋まさり型の稲となりますので、原則として追肥は不要です。

お問い合わせ先



JA全農 肥料農薬部 技術対策課 **栽培マニュアル配布可能**

TEL.03-6271-8291 FAX.0120-771639(ナナイロサク)